

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：17601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K04097

研究課題名(和文) 相互行為から見る中山間地域への移住の実態：移住者と地元者の語りにおける境界と融合

研究課題名(英文) The reality of migration to mountainous areas from the perspective of interaction: boundaries and integrations in the stories of migrants and locals

研究代表者

福島 三穂子 (Fukushima, Mihoko)

宮崎大学・地域資源創成学部・准教授

研究者番号：40735784

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：宮崎県の中山間地域である、綾町と西米良村を主なフィールドとし、会話分析や相互行為分析を方法論として使いながら、地元住民と外の人びとである移住者との共存の成功につながると考えられる、地域が大切にしている食や伝統行事などの地域資源に焦点を当て、彼らの語りを分析した。そして移住者と地元民の自己の表示、社会的関係性の表示がどのように偶発的な語りの中で構築されるのかを明らかにした。中山間地域の地域活性化という大枠の中で、観光を使った地域活動が多いことから、観光の視点から産学官連携事業も行い、学会や研究会での報告、論文発表を行った。地域住民への報告会も定期的に実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中山間地域に住む地元住民による地域活性化について、彼らの語りをデータとし会話分析を手法とした分析を行った研究は少ない。地元の人々による相互行為を地域資源と捉え、質的な分析を行ったことには意義があると考えられる。分析を通じて地元住民の当たり前の常識をみえる化し彼らと共有することで、移住者など外部者との融合の一つの足掛かりとすることが出来た。また中山間地域の食などの伝統や活性化の取り組みについての地域住民の語りを記録しデータとして残したことは、地域の伝統継承に役立つものである。

研究成果の概要(英文)：Using conversation analysis as a methodology, I analyzed the narratives of local residents and migrants in Aya Town and Nishimera Village in the mountainous regions of Miyazaki Prefecture, focusing on local resources such as food and traditional events that are valued by the local community and seemingly lead to successful coexistence between local residents as insiders and migrants as outsiders. I have revealed the ways in which the displays of self and social relationalities of migrants and locals are constructed contingently in their talks. Further, within the framework of regional revitalization in remote mountainous areas, I also conducted industry-academia-government collaboration projects from the perspective of tourism. Findings have been presented and published at academic conferences and research meetings. Debriefing sessions for local residents were also regularly held.

研究分野：社会学

キーワード：会話分析 相互行為分析 中山間地域 地域資源

1. 研究開始当初の背景

人口増加や地域活性化による地域の存続を狙う多くの地方の自治体は、移住者優遇措置などを行い移住者誘致に力を入れている。東日本大震災もきっかけになり、安全な田舎暮らしを求め、移住をする人口は近年増えている。内閣府による農山漁村に関する世論調査（平成26年）によれば、都市地域に住む3割以上が農山漁村地域への定住への願望について、ある又はどちらかというたと答えている。これは、各地方自治体の移住者誘致事業の1つの成果と言える。

しかし、一方で移住失敗の報告も多くなされてきている。移住先の受け入れ態勢に起因する、さまざまな原因がある中で、伝統的で保守的な価値観を持つ地元民による「田舎のおきて」が存在していて、田舎特有の閉塞感が壁になっているケースも多く聞かれる。内と外を意識した境界線が引かれ、地元民以外は「よそもの」として扱われるため、また住民同士の人間関係の距離感が近いこと、なかなか地元のコミュニティに入り込めず、心地よい新生活を確立できない。少子高齢化が激しく進む地方の中山間地域におけるコミュニティでは、移住者を強く望む一方、受け入れ態勢確立に苦勞していると言える。本研究は、宮崎県の中山間地域における地域創成を目的とし、移住者と移住先の地元民との相互行為を分析するものである。

移住者は移住者なりの文化を持ち、地元民は地元民なりの文化をもち、それぞれのアイデンティティがあり、それぞれが他者に対し「よそもの」という社会的関係性を表示する。彼らによる「よそもの」という定義は、どこから始まり、どう意味づけされ、理解され、共有されていくのか。その過程の中で、どこから異文化融合が始まるのか、その境界と融合の相互行為の現場を分析することで、移住者と地元民の共存の実態を明らかにしていく。

2. 研究の目的

現代社会における少子高齢化の流れを受け、特に地方の中山間地域の自治体は、人口増加と地域活性化を目的とした、様々な移住者優遇措置を図ってきている。様々な形での生き残りをかけた地域活性化事業が行われ、人口を増やすことを目的とした移住促進や経済効果を狙った観光事業の立ち上げなどが本研究の調査値でも行われている。小川作小屋村はその活性化事業により多くの賞を受け、その様子はメディアでも報道されたり、経済効果を主軸とした量的な分析は行われている。しかし、移住生活の実態や移住者と地元民の共存の実態を明らかにする質的な調査法を用いた研究は少ない。特に移住者に関する研究の多くは、インタビューやアンケートの手法を使ったものに限られている。本研究では、地元の人々の語りに焦点を当て、会話分析や相互行為分析を方法論とし、移住者と地元民の共存の実態を、彼らの語りの中から明らかにすることを目的とした。移住者と地元民の自己の表示、社会的関係性の表示はどう行われ、移住者なのか地元民なのかという境界と融合がどのように偶発的な語りの中で構築されるのか分析する。宮崎の中山間地域の地元住民による地域活性化をケーススタディとして、地域活性化という地域社会の動きを人びとの相互行為から紐解く。

3. 研究の方法

宮崎県東諸県郡綾町では、平成28年度から継続している地域の魅力再発見プロジェクトをベースに移住者と地元民からの聞き取り調査を行う。また、座談会を開き、移住者と地元民が自由に話す場を作り、「よそもの」の目から見た資源と「自分たち」の目から見た資源を、彼らがど

う語るのかを分析する。さらに、地域の行事が盛んな地域であり、文化祭や月の神楽などの行事へ学生と一緒に参加する。その中で、長い歴史を持つ、地域の伝統行事をどう地域住民が企画し、実践するのか、そこで起こる相互行為をデータとして撮影する。また、インタビューなど、エスノグラフィックな調査も行う。宮崎県西米良村小川作小屋村との連携においては、「令和(平成)の桃源郷 小川作小屋づくり」を成功させている地域である小川作小屋村がどのように経済効果も生み出し、地域創成事業の成功例とされているのかを明らかにする。また今後に向けての課題を明らかにする。一番の経済効果をもたらした、「小川作小屋村四季御膳」は、10名の女性がシフトを交代しながら料理しているが、その半数は現在80歳に近い年齢であり、「地元の味」の継承が危ぶまれている。「わたし」が作る料理は、「他者」には作れない、という問題が存在し、レシピの作成が進まない。しかし、村の協議会は100年先まで守り継がれる集落を目指しており、地元食材を活かした伝統的な味の継承は重要課題である。移住者を含めた若者(30代、40代)への「地元の味」は今後どのようなかたちで継承されていくのか、彼らの相互行為の中から、明らかにしていきたい。料理は高齢の地元民にとってアイデンティティの一部である。「わたし」に帰属するものが、「他者」と共有するものへと変化する、そのプロセスを追っていきたい。そのために、1)それぞれの女性への聞き取り調査を行う。2)座談会を開いて、彼らが「地元の味」について話し合う機会を作る。3)実際に小川作小屋四季御膳を作る現場を撮影させてもらう。異文化の境界と融合という問題については、日系人が彼らの語りの中で、特に、日本人に対して日系文化を語る時、どう文化の境界と融合の関係性を表示するのか、という視点から分析を行っているがその実績を基礎に本研究を積み上げていきたいと考える。カナダにいる日系人は、日本文化にも、カナダの文化にも強く影響を受けながら、独自の文化を確立してきた。2つの文化の融合が起きた場所では、どこまでが日本文化なのか、どこからが日系文化なのか、更にはどこからがカナダの文化なのかははっきりしない。彼らがどのように会話を組み立てているのかを手がかりに、会話分析の手法を使って分析した。本研究においても、人が新たなコミュニティに入ろうとした時にどんな相互行為が構築されるのか、という問題について多角的に分析する。

4. 研究成果

宮崎県の中山間地域である、綾町と西米良村を主なフィールドとし、会話分析や相互行為分析を方法論として使いながら、地元住民と外の人びとである移住者との共存の成功につながると考えられる、地域が大切にしている食や伝統行事、自然などの地域資源に焦点を当て、彼らの語りを分析した。そして移住者と地元民の自己の表示、社会的関係性の表示がどのように偶発的な語りの中で構築されるのかを明らかにした。

郷土料理を作るための話し合いを追っていくと、地元民が「当たり前」としている食材や料理の扱いにパターンが見えてきた。宮崎県は生産額ベース食料自給率が日本一であり、地産地消の文化が根付いている土地であるが、観光資源となっている四季御膳のメニュー作りでも自給自足が「当たり前」となっている姿が浮き彫りになった。それは、材料の供給者とそれに関わる様々な知識、さらに作り手の生活が一体化していることが不可欠な仕組みの中で生まれる「当たり前」であり社会的慣習としての和食を具現化しているものでもあった。だからこそ小川作小屋村で作られる食事は伝統的な郷土料理と形容され、観光資源となり得ているわけだが、同時にこの「当たり前」が共通項として彼らの自己表示のひとつの方法として使われている。彼らにとって郷土料理は日常の台所で作られる彼らの食事であり、彼らには伝統的な郷土料理を作っているという表示はされないのである。郷土料理と呼ぶのは観光客を含む外から来た人びとなのであ

る。つまり、この食事にまつわる自己表示が、移住者との境界線を作っているのである。移住者を歓迎する地元住民からは、移住者と地元住民の間にあるかもしれない境界はあからさまな言葉で示唆されるようなことはない。しかし、例えば食を使った地域活性化を実際に移住者と一緒に行う際には、料理に関する語りの中で、見えない境界線が引かれているのである。

人と人との密接な関わりの中で作られている食は特別で貴重であるからこそ、ユネスコ無形文化遺産として登録された和食と同様、その継承が小川地区でも懸念されている。少子高齢化の時代にあり「当たり前」が共有できなくなった時のために、レシピ作りなどの動きはあるものの、私の味は私にしか作れないという内の文化も根強く、外からの介入を難しくしている。外の人間にとっての伝統料理は、地元住民にとっては私の料理であり、重要な自己表示の一環なのである。

綾町の移住促進を含む地域活性化に関わる、地元住民の語りの中でもあるパターンが見られたが、それは地元住民と移住者や外部の人々の自然、歴史、伝統などへの指向性が、両者の比較の上で表示されることが多かったということである。比較をすることでうちと外の見えない境界線がここでも引かれていることが見えてきた。これはカナダの日系人の語りとも共通する分析結果であり、自己の文化を語る過程において他者が見えてくるということが明らかになった。

中山間地域の地域活性化という大枠の中で、観光を使った地域活動が多いことから、観光の視点から産学官連携事業も行い、学会や研究会での報告、論文発表を行った。地域住民への報告会も定期的実施した。崖崩れによる交通手段の問題やコロナの問題により、現地での調査は3年以上予定していた形で出来ていないこと、またデータの文字起こしの要員が予定した形で教育できなかったことなどが要因となり、学会発表や論文に遅れが出ているが、最終年度以降になるが、会話分析者が集まる国際学会での論文発表を予定している。

中山間地域に住む地元住民による地域活性化について、彼らの語りをデータとし会話分析を手法とした分析を行った研究は少ない。地元の人々による相互行為を地域資源と捉え、質的な分析を行ったことには意義があると考え。分析を通じて地元住民の当たり前の常識を見える化し彼らと共有することで、移住者など「よそもの」との融合の一つの足掛かりとすることが出来た。地方の中山間地域の生き残りをかけた地域活性化の重要な資源となる、食や伝統行事などを使った活性化の取り組みについての地域住民の語りを記録しデータとして残したことは、地域の伝統継承に役立つものである。今後も、地域の方々と連携し調査を継続させて頂き、地域活動の現場の中で、地域の方々にとっては「当たり前」の様々な日常における実践を紐解くことで、課題となっている郷土料理や伝統行事の継承への足掛かりとすることができれば、観光資源の保全にも繋がっていくと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 福島三穂子	4. 巻 9
2. 論文標題 地域観光の推進：宮崎市における産学官連携事業の会議場面における相互行為の分析から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 観光学会学会プロシーディング	6. 最初と最後の頁 82-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 福島三穂子	4. 巻 7
2. 論文標題 台湾遊脚のための地域魅力再見フィールドワークの実施 宮崎観光体験メニューの商品化に向けて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 観光学会学会 プロシーディングス	6. 最初と最後の頁 68-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 福島三穂子
2. 発表標題 台湾遊脚のための地域魅力再見フィールドワークの実施 宮崎観光体験メニューの商品化に向けて
3. 学会等名 観光学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 福島三穂子
2. 発表標題 綾町の魅力を海外観光客へアピール
3. 学会等名 平成30年度 綾町・宮崎大学連携事業 年次報告会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Mihoko Fukushima
2. 発表標題 Ogawa Sakugoya Mura: The revitalisation of a rural community through cultural and environmental tourism
3. 学会等名 The 13th International Conference "ASIAN Community Knowledge Networks for the Economy, Society, and Environment Stability (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関